

学校を
創る

地域と共に歩む学校創りを目指して



市原市立三和中学校長 きたもり いさお
北森 功

1 はじめに

校長として、初めて職員の前に立ったとき、着任式で子供の前に立ったとき、入学式での式辞、今までとは違う重責と緊張感は今でも忘れられない。しかし1年たった今、それが、やりがいへと変わっていった。それは学校を支える地域の温かさ、子供たちの素直な姿、職員の熱意がそうさせたのだと思う。1年間を振り返って思うことは、地域、生徒、職員への「感謝」と、その期待に応える「決意」である。

三和中学校は、市原市の中心に位置し、周囲は昔ながらの田園風景が広がる自然豊かな環境の学校である。保護者の多くは地元出身であり、卒業生が多い。生徒数も134名と小規模校である。創立70年の伝統校で地域とのつながりが強い。三和中において地域と共に学校を創るということは、学校経営の柱であると考えている。

2 本校との関わり

三和中学校には、10年ほど前、青少年指導センターの職員として半年ほどサポートに関っていたことがある。当時は校内暴力が多く見られ、市内でも多くの学校が苦慮し、教育困難な状況がみられた。本校も、その中の1校であった。しかし、私が赴任した時には、気持ちの良いあいさつができ、真剣に授業や部活に取り組む生徒の姿があった。10年前の姿を知っているだけに、その間に勤められた校長、先生方をはじめとした教職員の努力、地域の協力で涙が出

る思いがした。同時に、この歩みを「一歩でも前へ」進める決意を固めた。

3 女川中学校との絆

本校の玄関前には大きな花時計がある。これは、東日本大震災で被災した女川中学校との絆の証である。



三和中学校「花時計」と全校生徒

震災後「時が止まった学校」として報じられた女川中学校に、花時計を贈り「同じ時を刻む学校」として連携が始まった。以来、生徒会を中心として支援活動が始まり、毎年「ジャンボ年賀状」を送ったり、全校生徒の手形をウロコに見立てた鯉のぼりを贈ったり、「いのちの石碑」建立の募金活動などをしてきた。その後、三和コミュニティーセンターと地域の協力を得て「女川元気会」に「三和会」として支援参加し、年1回東京での総会に参加するなど、地域を挙げて支援の輪が広がっている。本校では、女川中学校の女川体操を取り入れ、盆踊りや市民祭りで披露している。これらの活動は震災以来7年間続いている。地域と

共に歩んだこれらの活動が、先に記した教育困難な状況からの脱却と、信頼回復に大きな力となった。今年度は、昨年女川中学校で完成した「命の教科書」を使って、道徳教育と防災教育に力を入れていく予定である。今後も女川中学校との連携を続け、子供たちの心の教育を進めたい。



女川のいのちの石碑

4 三和ドリームスクール

三和中学校区は1中学校、3小学校と小規模学校区である。現在市原市の分離型一貫校研究指定を受け、「三和ドリームスクール」として活動している。具体的には、

- (1)合唱祭に小学生を招いての合唱交歓会。
- (2)中学生が母校に帰って運動会の前日準備の手伝い。
- (3)小学校運動会での女川体操披露。
- (4)小中学校間での交換授業（小中の教員を入れ替えて実施する授業。昨年度は音楽と道徳、今年度は理科と英語で実施予定）。
- (5)中学生が各小学校へ出向き、英語スピーチコンテストと意見発表大会の発表。
- (6)文化庁主催の小中合同芸術鑑賞教室の実施（中学校区約450名の児童生徒が三和中学校に集まり実施）。今年度は学区の高校に協力してもらい、小中高の芸術鑑賞教室を予定している。高校の和太鼓部の鑑賞と小中高吹奏楽部のコラボ演奏を予定している。この活動を通して、小中

の交流が盛んになり、中1ギャップの解消に効果が見られた。小・中学校教職員の連携が深まり、小中学校間の引き継ぎがスムーズになった。

5 資源回収を通じた地域連携

本校では年3回資源回収を行っている。資源回収については、特に珍しいことではないが、その規模には驚かされる。年間80トンもの資源ゴミの回収である。学区内にクリーンセンターがあり回収日には、ゴミ収集車、コンテナが、10台以上校庭に並べられるのである。そこへ各地域から資源ゴミを乗せたトラックや乗用車が、100台以上校庭に列をなす。その光景は、まるで清掃工場が移動してきたようである。保護者は「資源回収なら地域みんなで協力できる。親子で協力して活動できる行事はとてもよい。」と話す。収益は補助金を合わせると、100万円近くになる。これは市内で一番多い量であり、市役所からも感謝されている。まさに地域が一体となって学校を支えてくれている活動であり、本当に感謝している。



地域が一体となって行う資源回収

6 おわりに

今年度「あかるく、いつも、さきに、つづけて、あいさつができる生徒」を掲げ実践している。これは新任校長研修で教えていただいたものだ。この研修では手探り状態の私に、様々なヒントを与えてくれた。

今後は、今まで述べてきた活動をさらに発展させ、地域と共に学校創りを進めたいと考える。地域、生徒、教職員への感謝の気持ちを忘れずに「一歩でも前へ」進めるよう、決意を新たに日々努力していきたい。



義務教育学校「大栄みらい学園（仮称）」 開校に向けて



成田市立大栄中学校教頭 みむら よういち
三村 洋一

1 はじめに

本校は、成田市東部に位置する旧大栄町を学区としている。学区中央に流れる大須賀川周辺の田園を、高台の畑作地帯が取り巻く自然豊かな環境にある。大栄地区には本校と5つの小学校があり、2021年度にはそれら6つの学校を統合し、義務教育学校「大栄みらい学園（仮称）」として新たなスタートを切ることとなった。

新任教頭として赴任した昨年度は、学校教育目標の具現化とともに、成田市教育委員会や学区小学校との連携を図り、開校の準備を進めてきた。

現在、義務教育学校の開校に向けた準備は、私にとって重要な課題の一つである。

2 義務教育学校開校に向けて

(1) 学校教育目標の具現化と小中連携

学校教育目標の具現化を図る日々の教育実践は、新しい学校づくりの基礎となり、伝統として義務教育学校の教育活動に引き継がれていくものである。特に、本校学校経営の重点に挙げている「小学校との連携」は、開校準備のための大きな柱となると考えている。

以前より大栄地区では、小中連携推進協議会を組織し、地区児童生徒のよりよい成長を目指して、小・中学校職員が一丸となって教育に当たるために連携を進めてきた。

①学習指導（家庭学習の奨励・学習用具の準備・話を聞く態度の育成）と生活指導（挨拶と返事、言葉遣い・時間の意識・清

- 掃指導)の共通指導項目の設定・再検討
- ②小・中学校の相互授業参観、小学校保護者も対象とした授業公開期間の設定
- ③大栄中体育祭での小学校対抗リレーの実施、学区運動会への中学生の役員派遣
- ④各小学校6年生の大栄中合唱コンクールへの参加と合同合唱
- ⑤各小学校6年生が、授業参観と部活動体験を行う新入生体験入学
- ⑥中学校教員による小学校への出前授業
- ⑦特別支援学級の交流行事や中学校の授業体験の実施
- ⑧学区小・中学校の学校だよりの交換と紹介コーナーの設置

連携活動は、小・中学校それぞれの担当者によって計画・運営されているが、担当者同士が何度も打合せを行うことは時間的に困難である。円滑な運営のために学区内小学校の教頭と連絡を密にし、調整を図ることで担当者をサポートしている。また、学区の小学校は、学年の児童数が20名に満たない小規模校が多く、中学校入学時には、小学校と違う大きな集団に戸惑いを感じる子供もいる。

本校の先生方は、日頃から受容的に生徒に接し、信頼関係の構築に努めている。連携活動においても、本校の温かい雰囲気を感じてもらい、小学生が中学校生活に希望が持てる体験となるよう、本校職員に働きかけている。

(2)小中連携組織の活性化

①各部会の運営

大栄地区小中連携推進協議会では、地区の小・中学校各教頭を中心に、教育課程・生徒指導・行事交流・地域連携・事務・養護の6つの部会を編成し、各教科・領域で小中連携・小小連携を図っている。私は、生徒指導部会の責任者として、これまで数多くの生徒指導事案に関わってきた経験を生かし、情報交換のポイントや学校間の連携と対応についてアドバイスしている。

②市の組織との連携

義務教育学校開校の詳細については、市が組織する「小中一貫教育準備委員会」が中心となり準備を進めている。今年度初めには、大栄地区校長会の原案をもとに地区教頭会で協議し、市の組織とリンクするよう大栄地区小中連携推進協議会の組織を再編したところである。それぞれの組織・部会における協議の進捗状況や決定事項について把握し、本校の職員へ情報提供するとともに、検討事項を整理することも教頭の大切な役割である。

③職員研修の運営

大栄地区小中連携推進協議会では、職員研修も行っている。現在勤務している職員の多くが義務教育学校のオープニングスタッフとなることから「大栄地区の新しい学校はどのような学校にしたいか」ということを近年の大きなテーマとしている。本研修では、これまで、義務教育学校のイメージの共有と教育課程をはじめとする運営上の具体的な内容を検討してきた。開校の時期が迫り、より具体的に研修を進める必要があることから、今夏の研修では、各校事務職員の協力を得て、備品整理を行った。各教科・領域の備品について移設・廃棄・購入計画を立て、子供たちを迎えるための教育環境の整備という実務的な研修を実施することができた。

こうした小中連携行事や研修の計画・運

営は、地区教頭会が中心となっていく。地区教頭会での協議は開校準備に欠かせないが、それ以上に地区教頭会は、新米教頭の私にとって最も身近な研修の場であり、各小学校教頭先生方の協力を心強く感じている。

(3)校内外の安全確保

新しく開校する義務教育学校は、現在の本校敷地に建設される。すでにそのための工事が校内外で着々と進められている。

本校は学区が広く、ほとんどの生徒が自転車で通学しているため、学校周辺の道路工事も、登下校の安全面への配慮が特に重要である。また、昨年度は2つあるグラウンドのうち、陸上競技場の大規模な改修工事が始まった。校内の工事は、生徒の安全確保はもちろん、教育活動が制限されるという問題がある。成田市教育委員会学校施設課や工事業者の方々との打合せでは、工事の日程や範囲を確認し、学校行事との重なりや登下校などの生徒の動きが大きい時間帯を避けるよう依頼してきた。その中で学校施設課の方々には、本校の教育活動に対し、理解と細かい配慮をいただき、感謝している。

関係の方々との連携と口頭連絡や学校便り等による職員・生徒・保護者への工事の周知に努めることで、幸いにも事故や生徒の活動への大きな支障はなく、工事が進んでいる。

3 おわりに

義務教育学校の開校には、多くの人々が関わっている。校長の指導、本校生徒と教職員および保護者や地域の理解、学区内小学校の先生方や市教育委員会の方々の協力がなければ、準備は進まない。

新しい物事に取り組む時、人は大きな希望を抱く。子供たちと彼らを取り巻く様々な方の希望をエネルギーに、今後も謙虚な姿勢を忘れず、真摯に職務に励みたい。

学校を動かす

主幹教諭として



茂原市立富士見中学校主幹教諭 佐藤 千秋

1 はじめに

私は昨年度より主幹教諭という立場で校務に当たっている。また、校務分掌では教務主任として教育計画の立案、学校行事の企画・運営等校務の遂行に尽力している。校長・教頭をはじめ、職員に支えられながら充実した日々を過ごすことができおり、自分の役割に集中して取り組むことができている。

2 主幹教諭として心がけていること

(1)先を見て計画・行動する

中学校現場での1年はあっという間に過ぎていく。教育的価値を見いだして実施する学校行事でさえも、時として「こなす」ことだけで精一杯となってしまふ。そうならないためにも、誰よりも先を見て計画し、行動するようにしている。ただ、日々の授業実践や学校行事に取り組んでいく中で、どうしても計画通りに進まない場合もある。そうした時にこそ、臨機応変な対応が必要となるが、常に全体の状況を把握しておくことで素早い対応が可能となる。

(2)職員とのコミュニケーション

以前にも教務主任として校務に当たった経験があるが、主幹教諭となってからは、職員から相談を受けたりアドバイスを求められたりする機会がかなり増えた。

管理職と教職員をつなぐ立場であることを自覚し、風通しの良い職員室を目指して日々生活している。

(3)「**凡事徹底**」と「**率先垂範**」

本校の校長が掲げる「学校経営方針」の中に「**凡事徹底**」がある。これは職員と生徒に「**当たり前**のことを**当たり前**に行えるようになる。」ことが大切であること

とを示した言葉である。

教職員として、日々の校務をしっかりと行うと同時に、生徒に指導する上でもまずは自分が範を示すことが大切であると考えている。

主幹教諭として、そして教務主任として、職員の先頭に立ち「**凡事徹底**」「**率先垂範**」することで、校務の効率化を図っている。



(4)若手・ミドルリーダーの育成

若年層教員や講師の増加に伴い、教科指導・生徒指導・部活動指導といった日常的な指導に対する指導力不足が叫ばれている。また、30代後半から40代前半の中堅層職員の不足から、学校運営の中心となる存在のミドルリーダー不足となっている現状がある。

学校現場は管理職からの「**トップダウン**」だけでは上手く回らない。若手からの「**ボトムアップ**」とそれを上手にコントロールするミドルリーダーの存在が不可欠である。

若手には相互授業参観・要請訪問等、授業力アップを、中堅層教員には組織マネジメントという面から指導・助言している。

3 おわりに

主幹教諭としてまだまだ十分な働きができているとは言えないが、これからも日々の実践を基に、若手・中堅層教員とともに自分自身も成長していきたいと考えている。


 子供を知る

初任者研修を終えて

 習志野市立第二中学校教諭 たつの 辰野

つばさ 翼


初任者研修では、教科指導や生徒指導だけでなく、学級経営、電話対応、ICT機器の使い方など様々なことを学んだ。その中で、特に印象に残っているのは異校種交流の研修である。この研修では、県内幼・小・中・高・特別支援学校と様々な校種の教員が同じグループになってお互いの校種の取組や、子供との接し方について意見を交換した。同じ問題が発生しても、子供の年齢によって対応の仕方が変わることや、お互いの校種で困っていることの相違などについて知ることができる貴重な機会だったと思う。

私は、現在中学2年生の担任をしている。昨年に引き続き担任をしているが、毎日の活動で気を付けていることの一つに、一日が終わったら必ず教室を見て回ることがある。これは、昨年度の初任者研修の時に、毎日教室を見て回ることによってちょっとした生徒の変化に気づきやすくなり、問題の早期発見につながると学んでから実践を始めた。

教員は他の職種と違い、研修期間はなく、採用と同時に即戦力にならないといけない。そのため、日々の業務をこなしながら研修を受けて学ぶ必要がある。その中で一年目の私にとって初任者研修はとても大きなものであった。また、研修中、同期の教員と意見交換をすることで、お互いの悩みも相談することができた。これからも様々な研修を受けながら生徒とともに日々成長していきたい。


 子供を知る

「これから」を考えて

 県立松戸特別支援学校教諭 とだ 戸田 しょうた 尚太


昨年度、初任者としての1年を過ごし、多くの研修に出ささせていただいた。その中では「支援の仕方」について考える機会が多くあった。障害種や学校種によって考え方が異なる点が多く、こういった言葉をかけるのが良いのか、どんな教材を使用するのが良いのかという話し合いでは、多くの教員と意見を交えた。

そして、話し合いをしていく中で私がより必要だと感じたのは、「周りからの支援を減らしていくための支援」である。目の前にいる児童生徒が社会に出て行くときに、自分の力でできることがたくさんあれば、その分誰かの力を借りなくても生活することができる。そして、一人でやることができたという自信をもつことにもつながるということを学んだ。私の勤務している肢体不自由の特別支援学校には、思うように身体を動かすことが難しい児童生徒が多く在籍しているが、難しい、時間がかかるということを理由にすぐ手を出すのではなく、教員側が「待つ」という支援の大切さを改めて認識することができた。

今年度、生徒会を担当することになり、クラス・学年だけでなく、学部を越えて多くの児童生徒との関わりをもつ機会ができた。一人一人の様子を見て、待つところと支援を行うところを考えながら、向き合っていきたいと思う。

授業を
創る

未来を生き抜く資質・能力をつけるために



県立上総高等学校主幹教諭 いとかわ やすひで
糸川 靖英

1 これからの学校教育

AI（人工知能）の発達やIoTの実現などの技術革新の影響により、今後10年～20年間で職業のあり方が変化するなど、以前は想像もしなかった姿に社会が変わりつつある。そして、今後も予測困難な変化を社会は遂げていくと考えられている。

そのような社会の中で、学校教育に求められるのは、これからの時代に求められる資質・能力を明確化し、それを生徒に身に付けさせるための指導の確立である。

本校では、育てたい生徒像を『社会で活躍できる生徒』とし、生徒に身に付けさせたい資質・能力を『対話力』と明確化し、学校教育全体を通してカリキュラム・マネジメントに取り組んでいる。資質・能力（対話力）を育むにあたり、どのような点を工夫して授業を創るのか、私の取組を述べたいと思う。

2 「主体的・対話的で深い学び」に向けて

(1)授業改善

生徒に対話力を身に付けさせるためには、知らず知らずのうちに生徒が対話する場面を意図的に授業の中に設けることが必要である。そのために、授業内で具体的に取り組んでいることは、学習内容の明確化、問いの工夫、授業形態の工夫、振り返りである。

また、これからの時代に求められる資質・能力を育成するためには「主体的・対話

的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の視点に立った授業改善が不可欠である。以下、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点で整理して紹介することとする。

(2)主体的な学び

授業の始めに「本時の目標」を必ず提示し、50分の授業を4つの項目で時間ごとに区切って行っている。具体的には、学び直し、学習内容の説明、問題演習、振り返りである。これを毎時間行い、パターン化していくことで、生徒は見通しを持って学習に臨む姿勢ができてくる。また、ただ聞いているだけの一方的な授業ではなく、「本時の目標」の達成に向けて主体的に学習を進めていくことができている。

「本時の目標」を提示するにあたっては、その時間に「何を学んでいるのか」を明確にするだけでなく、「何ができるようになるのか」という視点を取り入れている。また、単元や教科・科目の学びを通して身に付けてほしい力や授業者の想いを伝える場としても活用している。そうすることで、生徒も学ぶ意義を実感して学習に臨めるだけでなく、授業者側の指導上の軸も構築できてくる。

生徒の実態に応じた目標設定や個に応じた目標設定を行うことも重要である。目標を達成することで自己肯定感を抱き、個人の中に新たに目標を生み出すことによって主体的になり、学びも深まると考える。そ

のためにも、生徒理解を十分に行い、安心して会話のできる存在として立ち居ふるまうように心がけている。

(3)対話的な学び

生徒が授業者の顔色を窺わずに主体的に対話的な学びを促進するためには、「授業中におしゃべりや立ち歩きをしても安全・安心の場」を作ることが必要である。そのためにも、授業では聞く場面と活動する場面を明確に分け、活動する場面では生徒同士が協働的に課題を解決できるように「学習形態の工夫」をしている。

特に、問題演習の際には生徒が一人では解決できないような課題を意図的に設定し、必然的にペアワークやグループワークが生じるように「問いの工夫」をしている。

さらに、生徒に協働的な学習を行わせている際には、大きな声で一斉指導することはせず、問題の内容についての質問には必要以上に答えないことに徹している。ファシリテーター的な立場で、生徒たち自身で「自分たちの学び方」を生み出していくように声かけすることを心がけている。

対話的な学習方法で理解が深まったという経験が積み上がれば、生徒は主体的に対話的な学習方法を選択し、課題解決に向けて取り組むようになっていく。

(4)深い学び

生徒に授業を受けたままにさせないために「振り返り」を行うことは重要である。「問題が解けて良かった」で終わりにするのではなく、「何がわかったのか」「学習内容と社会とのつながりは何なのか」「何ができるようになったのか」「学び方はどうだったのか」等を振り返らせ、リフレクションカードに記入させ、自分の言葉で説明させている。これにより、学習を内省させるだけでなく生徒全員との「対話の場」を設けることができ、生徒理解に努めることが

できる。

「振り返り」に関しては多くの実践例があり、様々な場面で様々な方法・内容で行われている。大事なのは授業者がどのような意図を持って生徒の中に「気づき」を生じさせているかどうかだと考える。さらに、その「気づき」をどうアウトプットさせ、生徒自らの生活や将来の進路選択に関連付けさせられるかが深い学びへつながっていくと考える。

3 資質・能力の3つの柱と多面的評価

生徒に身に付けさせたい資質・能力が果たかどうかは、生徒がその資質・能力を発揮している姿を生み出す場面を意図的に設定した授業を創ることが必要となる。求められる視点は、新学習指導要領に明記された「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で整理することである。授業内の一つ一つの場面が3つの柱のどれに該当し、どう評価していくかを計画していかなければならない。

資質・能力を評価するにあたっては、一人一人の多様性に応じて、形成的評価を行う必要がある。そのために、資質・能力がどのように伸びているか評価の場面を作るために、振り返りに時間をかけている。そして、日々の記録を蓄積し、ポートフォリオ評価につなげていくことを目指している。

4 おわりに

時代の流れとともに学習指導方法の改善や教員の指導力の向上が求められている。しかし、目の前の生徒をどう育て、社会に送り出すのか試行錯誤することに変わりはない。

「チーム学校」として、生徒の実態を踏まえながら、教職員、保護者、地域の方々と連携を図りながら生徒を育てていきたい。